

(別添)

考査項目別運用表の記入方法及び留意事項

1 採点における標準的な考え方や留意事項

(1) 工種が特定できない場合

工種が複数に及ぶ場合は、主な工種で選択し、「運用表」にない工種の場合は、当該工事により近い工種を参考にして選択するものとする。

(2) 文書による改善、又は破壊を行った場合等の評価

評価対象項目にd又はeが1つでもある場合は、評価対象項目の該当項目によらず、d又はeの判定を行う。

(3) 運用表の中の評価対象外項目

評価対象項目で評価対象外の項目は削除した上、判定を行う。

(4) ばらつきによる基準

ばらつきによる判定は、試料数が概ね30個以上ある場合に行うことを基本とする。

試料数が30個未満の場合は、規格値・設計値と測定値との差の大小による規格値と測定値との関係性をもって、ばらつきに代えてもよいものとする。

(5) 品質、出来ばえの評価

品質、出来ばえについての評価はそれぞれの工種で判定を行う。

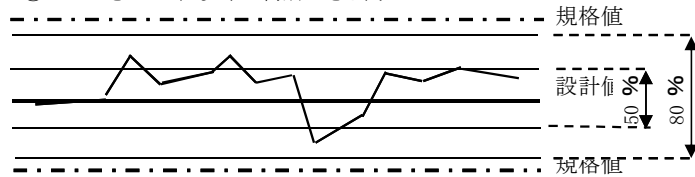
2 出来形及び品質のばらつきの考え方

(1) 試料数30個以上

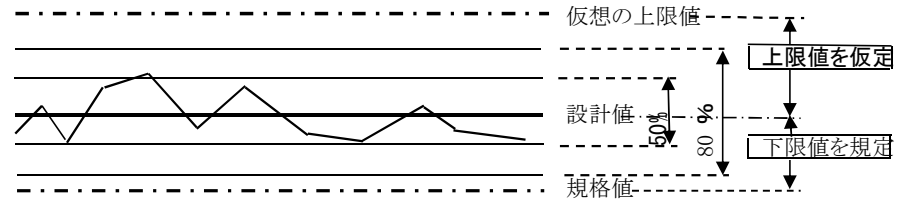
[管理図の場合]

(上・下限値がある場合)

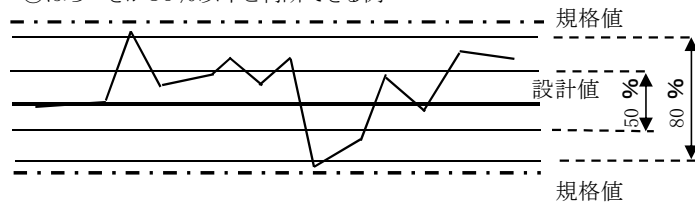
① ばらつきが50%以下と判断できる例



(下限値のみの場合)

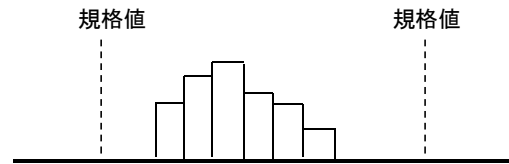


② ばらつきが80%以下と判断できる例

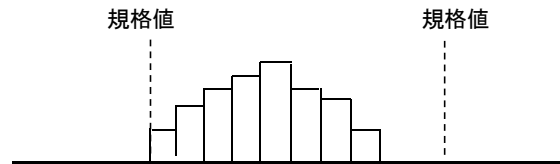


[度数表又は、ヒストグラムの場合]

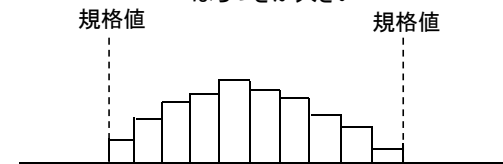
ばらつきが小さい



ばらついている



ばらつきが大きい



(2) 試料数30個未満

例：構造物延長の設計値L=4,000mmで、その許容値が±100mmの場合

① 測点1でL=4,020mm(設計値との差は+20mm)、測点2でL=3,950mm(設計値との差は-50mm)

[判断] 設計値との最大の差が許容値の50%であることから「ばらつきが50%以下」と同等

② 測点1でL=4,080mm(設計値との差は+80mm)、測点2でL=3,950mm(設計値との差は-50mm)

[判断] 設計値との最大の差が許容値の80%であることから「ばらつきが80%以下」と同等